

昭和四十七年度

春季公開講演会要旨

晋宋革命をめぐる仏教徒

京都大学名誉教授 塚 本 善 隆

すでに明らかな如く中国仏教は南北朝時代に非常な隆盛を迎えた。なかでも南朝の場合は、晋を宋が革命した五世紀になって顕著になり、その基盤のうえにやがて梁の武帝にいたる南朝仏教最盛期が築かれたといえよう。ここでは、その晋宋革命に際し、革命者である宋の創業者が仏教に好意を示し、隆盛に導くような経歴をもっていたこと、そしてその参謀達が仏教者をうまく利用したこと、また仏教者も革命に積極的に翼賛したことを述べ、宋の創業と共に仏教が隆盛にならざるを得ない諸条件が存在したことを明らかにしてみたいと思う。

もっとも、革命に利用され、かつ翼賛した仏教だけが南朝仏教を盛んにしたということではない。この革命の頃には、次の時代に仏教を発展させる諸要素が芽生えていたのである。その一つは、卓越した指導者道安・慧遠によって中国人による中国人の仏教教団が成立していたことであろう。その慧遠が仏教界は無論のこと、政界からも、また庶民からも非常な信頼と尊敬を受け、優れた多くの門弟を育てて世を去ったのが東晋の末であった。

一方、北の長安で鳩摩羅什が活躍したのも晋宋革命直前の時期である。彼によって龍樹仏教や有部系教学、「成実論」といった新しい仏教が紹介されるとともに「法華経」や「維摩経」などが再訳され、講経されて中国人に、より卑近なものとして提供された。

加えてこのころに新しい、しかも重要な經典の原典が中国人の僧侶によって将来されている。たとえば法顕が「摩訶僧祇律」や「泥洹経」を、支法領が「華嚴経」をもたらししたが、これらは今後の教団の規定と、教義研究の基礎となるものであった。

このように中国大乘仏教を進展させる諸要素が、晋宋革命の前後に集中していたのである。これらの諸要素が新革命者劉裕を得た宋の時代に受け継がれ開花するのであるが、それには劉裕自身にも仏教への傾斜があったことを史料に見ることができる。

当時、仏教に対立して、勢力をもっていたのは天師道教である。東晋の末には、この道教徒たちによる強力、かつ残酷な反政府の反乱があり、政府や社会を悩ませた。孫恩とその妹婿盧循の乱がそれである。この乱の鎮圧にもっとも武功をたてたのが劉裕である。山東の貧しい家に生まれ、南して軍隊に投じた彼の將軍としての地位を決定づけたのが孫恩、そして盧循の両乱を討伐したことであった。彼自身負傷し、苦心を重ねて鎮圧した反乱の母体は道教であった。これでは道教に対する好意は到底もち得なかったにちがいない。それは道教に対立する仏教に好意を寄せることになろう。このことは当時の人々の精神生活から考えて無理な推論ではない。宗教の比重が社会に、そして生活に非常に重要な地

位をしめたこの中世の人々は精神的支えとしての宗教なしにはおれなかった。したがって道教に好意を抱けない人は当然仏教に傾斜してゆくのである。それは劉裕が即位直後うちだした一つの宗教的政策からも証明できよう。それは淫祠の撤去である。淫祠が民を惑わし、財を費し弊害が多いとし、各地の諸廟を除くことを命じ、それが実行されたことが正史に見える。これら淫祠や廟は道教そのものではないかもしれないが、道教自体が民間信仰を基礎として成立している以上、道教的色彩が濃厚なものであったことは否定できない。おそらく劉裕は先の反乱に懲り、その温床となるものを肅清しておこうとしたのであろうが、仏教にはふれてはいない。

また、この劉裕と対立して晋を奪おうとしたものに桓玄が居た。この桓玄を討ったのも劉裕である。桓玄は慧遠と接触をもち、慧遠に対して敬畏の念を示しているが、それは慧遠を側近の一人に加えるためであつて仏教に対する帰依ではなかった。したがって彼は仏教界の腐敗と弊害を挙げ仏教淘汰の命令を出している。それによれば仏教が無欲の教えに背いて豪奢であり、役や税を避ける民や犯罪者が僧の形を借りていることを非難し、一、仏典を講義するもの、二、戒律を守る修道僧、三、隠栖して榮達に惑わされないもの。この三種の僧を除き他はすべて還俗せしめよとしている。これに対し慧遠は桓玄と数度の書簡をかわし、ある程度の墮落を認めつつも、三種の僧の範疇を外れてはいても、敬虔な仏教徒である僧も多く、これらを許すよう弁護している。この論争は結局、廬山を特別区として淘汰令の除外地域とすること

で終わったが、桓玄が仏教肅清の意図をもった人物であることは明白となり、彼が政權に近づくことは仏教界に不安を抱かせた。そのような桓玄を亡ぼしてくれたのが劉裕である。これらのことによつて仏教徒が劉裕に好意をもち、新しい外護者としての役割を期待したとしても無理はなからう。

こうした両者の接近は、劉裕の革命の成功を決定づけた長安征討の間に明確になった。その第一の人物として慧嚴が挙げられる。慧嚴は長安と洛陽を結ぶ一拠点、そして劉裕即位前の根拠地、寿春の出身である。儒教の素養をつんだがやがて仏教に興味をもち、長安に行き鳩摩羅什の門下に入り、のち南して建康にいたつた。いわば南での長安通であつた。長安遠征に必要不可欠の人物と見た劉裕は慧嚴に従軍を依頼した。方外の身を理由に一旦は辞退した慧嚴も再度の懇請にやむを得ず従軍に同意したと伝記には見えている。この慧嚴の協力によつて劉裕の長安征討は多くの便宜を得たであらうことは想像に難くない。

この慧嚴よりさらに積極的に革命に翼賛した仏教徒に慧義がいる。彼は劉裕の参謀たち范泰、王智と気脈を通じつつ、劉裕の革命を正當づける一芝居を演出しているのである。革命とは天の命が革まり、新しい立派な人に降つたとするが、それに、より信憑性と具体性をもたせるため瑞兆の出現を演出する事がよく歴史には見えるのである。この宋の革命の場合も例にもれず「宋書」符瑞志に見えている。それによると冀州の僧法称なるものが、嵩山の神から、江東の劉將軍は、漢の高祖の子孫で、今まさに天命を受け天子となる。その証として三十二璧と金一餅を授け

よう。との宣託を受けた。法称はこれを弟子の普敬に、普敬は兄弟弟子の慧義に告げ、慧義は南京行きこれを宣伝したという。

この瑞兆に関していかなる画策が行われたかを知る史料として劉裕の長安遠征に従軍した載延之の記録「西征記」がある。「西征記」そのものは現存しないが、「太平御覽」や「初学記」に引用があり見ることが出来る。それによって彼らの長安への道程をたどれるが、一行が洛陽近辺の嵩山を望む柏谷に陣を置いたとき、参謀の王智は劉裕に嵩山の瑞兆を知らせるとともに、慧義を呼びよせた。慧義に詳細を聞いた劉裕は、慧義自身嵩山に入り瑞兆の品、三十二璧と金一餅を持ち帰ってくれることを依頼した。この時やはり参謀の一人である范泰が慧義の傍にあって協力していたと思われる。慧義の伝によると、嵩山に入った慧義は、ふたたび嵩山の神の夢告に導かれ無事目的の品を手中にし劉裕のもとへ帰った。この時函谷関に達していた劉裕は壇を築きこれを拝受したという。そして范泰が「宋公祭嵩山文」を著わし劉裕にかわりこれを祭った。その文章の中には「金璧之贈、愧懼交盈」とあり、權威づけ、神聖化するに余念ない有様をよく示している。このような出来事は慧義そして王智・范泰、さらに今は軍中にあり慧義と同じ寺にいた慧嚴も加わり、互いに気脈を通じつつ、革命者として正當づけるために劉裕に捧げたものと考えられよう。あるいは劉裕自身もこの計画に加わっていたのかも知れない。

このようにして、第一幕を仏教徒の協力によって成功させた劉裕は長安を占領する。長安の古老たちが、ここは貴方の先祖の墓所であり、帝王となられる場所であると劉裕に告げたというが、

先の嵩山の神の瑞兆予言が広く喧伝され浸透していたことを物語っている。

劉裕はこの長安滞在中にまた一人の有力な僧侶を知った。それは鳩摩羅什の弟子であり、師なきあとその教団を統率していた僧導である。劉裕はその人物を見込んで南京への同行を申し入れていた。その南京で留守をまかされていた劉穆之が急死した。通知を手にした劉裕は急遽南京に引き帰り、そのあとに同行していた次子の劉義真を長安に残すことにした。その時劉裕はその息子の保護を僧導に依頼している。幼い子を高僧に托する、このようなことも当時珍らしいことではない。こうして劉裕が長安を去ると、そのあとを追うように異民族赫連勃勃が長安に攻め込んだ。辛くも城外にのがれ隠れひそんでいる義真を探索する胡族の軍隊の前にたちふさがったのが門弟をひきいた僧導であった。彼は生命をかけても義真を守る、したがってこれ以上の追求をやめるよう非常な勢いで告げた。この僧導の気迫と僧形の集団に圧倒された胡軍は追求を断念し城内に引き揚げたと僧導の伝には見えている。

こうして義真も、そして後を追った僧導とその門下も無事に長安のがれ、劉裕のいる寿春に到達したのである。

「水経注」によると寿春に導公寺と称する立派な寺があったと記している。「水経注」に関する注釈は数多いが、仏教をきらい、その知識に乏しい中国の学者はこの導公寺に全くふれてはいない。しかしこの導公寺こそ劉裕が居所を失った僧導のために感謝と敬意の念をこめて建立した寺であることは僧導の伝に明らかである。もっとも導公寺は俗称であり山のそばにある東山寺と記す

のがそれであろう。こうして僧導とその門下をとどめた劉裕は、さらに彼らを一門の家僧として優遇し、一門とその子弟の教育をゆだねている。劉裕をついだ者たちにはこの僧導の教化が伝わっているのである。

一方、長安では赫連勃勃による廃仏毀釈が行われていた。この胡族の迫害にたえかねた鳩摩羅什の門弟をはじめとする僧たちは、長安をのがれ、寿春の導公寺に僧導を頼った。僧導はこれを手厚く迎え、犠牲者の追善供養を営むこともあって、彼を慕うものは増加の一途をたどった。こうして導公寺は南遷した長安仏教、鳩摩羅什仏教の中心となり、宋の建国とともに都南京にまで進出する拠点となった。これが南朝に羅什系仏教を興隆させ、まづ中期以降に「成実論」研究、ついで三論学を興し、成実論学を庄して三論宗を成立させる源流となるのである。

さて、嵩山の瑞兆で活躍した慧義と范泰のその後も興味深い。范泰は革命の元勳として優遇されたが、彼は慧義のために南京に祇園寺なる寺を建立し、その経営を委ねている。この両者の関係を世間では、インドにおける祇園精舎の故事にたとえて賞賛したと慧義の伝には記されている。この祇園寺も中央仏教界の中心として重きをなしてくる。劉裕もまたこの革命の裏面を知る慧義を優遇したのは当然である。

この慧義はかなり個性的な人物であったと思われる。彼の惹起した問題の一つに「踞食」があった。祇園寺の教団では修道規範として「摩訶僧祇律」を採用し忠実にそれを遵守しようとした。その結果、食事の作法もインド風に胡坐し手摺みで食すること、

すなわち踞食を実行した。礼を重んずる中国でのこの作法は当然物議をかもした。ことに大檀越であるが、儒学者でもあった范泰は大いに驚き、踞食は中国の礼を乱すものであり、ただちに中止するよう申し入れ、数度の書簡の往復があった。しかし慧義は僧祇律を行う寺が中国の礼と異なるのは当然として聞き入れず、范泰はついに天子にまで訴えたが、結局うやむやのうちに終っている。また、祇園寺の門前には慧義にとり入って榮達を願う官吏たちの車馬の往来が絶えず、この祇園寺詣での人々がもたらした賄賂によって非常な財が残されたともいう。このような挿話からも、革命に翼賛した慧義が、単に仏教界に止まらず政界にも影響力をもつほどの絶大な地位と権勢を得ていたことを窺い知ることができよう。

彼の門下には人材が多く、それらもまた師の余塵を拝しているが、なかでも慧基は、その得度の式に慧義の申出によって天子の行幸を得、百官も列席している。のち彼は朝廷の信任をうけて榮達し、仏教における最高の官位である僧官となった。ただ無欲であった彼は慧義の残した莫大な財産を自らはとらず、法のためと、同門の弟子のために用いたとして伝で賞賛されている。

以上見たごとく、晋宋革命の間に、仏教者として慧嚴・僧導・慧義が劉裕を助け、革命に翼賛した。そして革命成功ののち多大の信任とともに教線拡張の場を得ることができたのである。ことに慧義に代表されるような政界との結びつきは、以後、南朝に見られる貴族的・政治的仏教、すなわち梁の武帝に象徴される南朝仏教の端緒を開いているようである。

一方劉裕を補佐した参謀たち、范泰、王智が半ば意識的に仏教

徒を利用し、革命達成のための役割をゆだねたことは注目に値する。言を換えれば、仏教がそれほどまでに社会的に有力な要素として中国社会に浸透しつつあった証拠といえよう。しかし、のちに梁から陳が革命したとき、瑞祥に仏牙を用い、仏教の精神にかなない、仏陀の承認を得たと宣伝して、陳の天子の即位を正当化している。そこでは一貫して仏教が革命の背景に用いられているが、晋宋革命では仏教徒は介在しても、そこに示されるものは中国的な嵩山の神であり、世俗の宝物であった。この両者を比較すると仏教化が頂点に達した時代と緒についた時代の差が歴然として現われているが、その頂点へと導くために、そして仏教の中国化を促すために晋宋革命とその間に活躍した仏教徒のはたした役割は偉大であったといえよう。

他に次の講演がありました。

一、「カリスマ」と「プレステイジ」

本学助教授 高橋 憲 昭

(標記発表については、先に大谷学報第五十二巻第一号に同名の論文として掲載)